

東京シンフォニエッタ

第59回 定期演奏会

ルカ・フランチェスコニの周縁
Periphery of Luca Francesconi

サントリーホール開館40周年記念 参加公演

- ルチアーノ・ベリオ：セクエンツァ 1 (1958)
- カールハインツ・シュトックハウゼン：クロイツシュピール (1951)
- ルチアーノ・ベリオ：セクエンツァ 1 (1992)
- ルカ・フランチェスコニ：アリア ノヴェッラ (2001)
 - ：ダ・カーポ (1985-86) (日本初演)
 - ：再び、ダ・カーポII (2011) (日本初演)

- Luciano Berio: Sequenza 1 (1958)
- Karlheinz Stockhausen: Kreuzspiel (1951)
- Luciano Berio: Sequenza 1 (1992)
- Luca Francesconi: Aria Novella (2001)
 - ：Da capo (1985-86) (Japanese premiere)
 - ：Encore/Da capo II (2011) (Japanese premiere)

*サントリーホール サマーフェスティバル2026
関連プログラム


SINFONietta TOKYO

2026.7.10 [Fri]

19:00開演 (18:30開場)

サントリーホール
ブルーローズ(小ホール)

全席自由 一般 ¥4,000 学生 ¥2,000(税込)

主催 一般社団法人東京シンフォニエッタ
助成 公益財団法人 ロームミュージックファンデーション
公益財団法人 **NOMURA** 野村財団
公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団
芸術文化振興基金 
協力 サントリーホール

お問い合わせ・マネジメント
(株)AMATI 03-3560-3010
東京都港区赤坂1-14-5-S103
<https://www.amati-tokyo.com>



SUNTORY HALL
この瞬間が、未来になる
Moments that Shape the Future

代表・音楽監督 板倉康明
フルート 齋藤和志 齋藤光晴
オーボエ 梅校理恵 辻 功 渡辺康之
クラリネット 川越あさみ 佐藤和歌子 西澤春代
ファゴット 河府有紀 長 哲也
ホルン 有馬純晴 岸上 穰 中島大之
トランペット 坂井俊博 高橋 敦
トロンボーン 西岡 基
パーカッション 石崎陽子 松倉利之 和田光世
ピアノ 藤原亜美
ハーブ 木村茉莉
ヴァイオリン 梅原真希子 海和伸子 山本千鶴 吉成とも子
ヴィオラ 百武由紀 吉田 篤
チェロ 宇田川元子 高麗正史 花崎 薫
コントラバス 那須野直裕 長谷川信久 吉田 秀
エレクトロニクス 有馬純壽
団友 渡辺 功 守山ひかる
副代表 齋藤和志
事務局 多田逸左久

2026年の私たちの7月定期は今まで主たる公演会場としていた東京文化会館が改装のために一時閉館するのを受けて、今までに演奏経験のあるサントリーホールブルーローズに場所を移します。それを受けて、今まで誰も試みてこなかった、サントリーホールで毎年8月に行われている重要な現代音楽の祭典「サントリーホール サマーフェスティバル関連プログラム」と銘打って今年のテーマ作曲家である、ルカ・フランチェスコニの作品のうち、サマーフェスティバルでは演奏されないものを中心に据え、テーマ作曲家の別の一面を紹介します。合わせてその周縁として、彼が影響を受けたと考えられる作曲家シュトックハウゼン、ペリオの名作と共に組まれたプログラムです。私たちの活動の中で初めての企画なので、8月末のサマーフェスティバルのいわば「前奏曲」としてお聞きいただければと思います。

とりわけ、ペリオの「セクエンツァ」については1958年初版の自由度の高い記譜法によるものと1992年のペリオ自身がリズムを明確に記譜した版の両方に齋藤和志が挑戦します。一つの公演で同一作品の異なる版を演奏する事は大変珍しく興味深いものであると同時に一人の作曲家が時代の潮流に合わせて自分の音楽をより自分の信ずる形で演奏させて届けたいと言う作曲家の根源に迫る企画としています。

ルカ・フランチェスコニが生まれる前に書かれた作品が彼がペリオとの交流が始まったのちに記譜法が変えられた事はその音楽観にどのように影響を与えたかと思いを巡らせるのも一興です。

今年の定期はサントリーホール開館40周年記念参加公演でもありますので、ぜひ今までとは異なる音響空間をお楽しみいただければと思います。

東京シフォニエッタ代表・音楽監督
板倉康明

<https://sinfonietta.tokyo/>



2026年7月10日 [金]
19:00開演(18:30開場)
サントリーホール ブルーローズ(小ホール)

全席自由(税込)
一般 ¥4,000 学生 ¥2,000

◎チケット予約

サントリーホールチケットセンター
0570-55-0017 (10:00~18:00)

イープラス……………<https://eplus.jp> (PC&携帯)

チケットぴあ……………<https://t.pia.jp> (PC&携帯)
[Pコード 326-375]

ローソンチケット……………<https://l-tike.com/> (PC&携帯)
[Lコード 32322]

次のことをあらかじめご承知の上、チケットをお買い求め下さい。

①やむを得ない事情により、曲目等が変更になる場合がございます。公演中止を除き、お買い求めいただきましたチケットのキャンセル・変更等はできません。②いかなる場合もチケットの再発行はできません。紛失等には十分ご注意ください。③演奏中は入場できません。④未就学児の同伴はご遠慮下さい。また、就学児以上のお子様もご入場には1人1枚のチケットが必要です。⑤全席指定席です。指定の座席にてご鑑賞ください。⑥場内での写真撮影・録音・録画・携帯電話等の使用は固くお断りいたします。⑦ネットオークション等によるチケットの転売は、トラブルの原因になりますのでお断りいたします。⑧他のお客様の迷惑となる場合、主催者の判断でご退場いただく場合がございます。

齋藤和志 (フルート) | セクエンツァI (1958)、セクエンツァII (1992)

東京藝術大学卒。第5回神戸国際フルートコンクール第4位、第70回日本音楽コンクール第1位及び加藤賞、E・ナカミチ賞受賞。第4回びわ湖国際フルートコンクール第1位。これまでに、パウル・マイゼン、金昌国、佐久間由美子、中川昌巳、中野富雄、三上明子、山崎成美の各氏に、またジャズ音楽を菊地康正、太田朱美、土井徳浩、池田篤の各氏に師事。現在、東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者。現代音楽の演奏にも力を注いでおり、現代音楽演奏グループ「東京シフォニエッタ」では副代表を務め、国際的に高い評価を得ている。第68回日本音楽コンクールでは作曲部門本選における演奏に対し審査員特別賞を受賞。さらに近年、クラシック音楽のみならず、ジャズやその他さまざまなジャンルの音楽、映像、舞踊、美術などとのコラボレーション、また自身作曲・編曲も行い、即興演奏も含め、異常に幅広いレパートリーを持つ「フルート界の奇行師」。2006年度アリオ音楽財団奨励賞受賞。東京藝術大学、国立音楽大学、洗足音楽大学非常勤講師。レッシュ4スタンス理論マスター級トレーナー



ルチアーノ・ペリオ (1925-2003)

イタリアの現代音楽界を代表する巨匠、伝統への深い敬意と革新的な実験精神を融合させた作曲家。音楽家一家に生まれ、ミラノ音楽院で学んだ後、1950年代にシュトックハウゼンらと共にケルンのスタジオやダルムシュタットの講習会に参加し、当時の前衛音楽最前線に立つ。ミラノに「スタジオ・ディ・フォノロジア」を設立し、電子音楽の発展にも貢献した。ペリオの作風の最大の特徴は、「声」への探求と「引用」の技法にある。代表作『セクエンツァ』シリーズは、特定のソロ楽器や声のために書かれた超絶技巧を要する連作で、楽器(声)の持つ可能性を極限まで引き出そうとしている。代表的な管弦楽曲『シンフォニア』では、マーラーのスケルツォを素材に文学テキストや過去の音楽作品の断片を重層的にコラージュし、音楽の記憶を再構築する手法で世界に衝撃を与えた。彼の音楽は、数学的な厳格さを持ちつつも、イタリア的な叙情性や演劇的な躍動感、さらには民謡への関心(『フォーク・ソングス』など)などさまざまな特徴が見られる。併せて単なる音楽的形式美に留まらず、言語学や文化人類学的な視点を取り入れた彼の作品は、20世紀音楽の語法を大きく広げるのに寄与している。



カールハインツ・シュトックハウゼン (1928-2007)

ドイツの作曲家。20世紀後半を代表する前衛音楽の旗手であり、現代音楽の方向性を決定付けたブーレーズなどと並ぶ最重要人物の一人。1950年代にケルンの電子音楽スタジオを拠点として活動を開始。『少年の歌』に代表される電子音楽の先駆的な作品を発表し、音響そのものを構成要素とする新しい表現を確立した。それとともに作品を構成する音高のみではなく持続や強弱なども数学的に制御する「総音列主義」理論の深化、演奏者に自由度を与える「不確定性の音楽」や、複数のオーケストラを配置する「空間音楽」など、既存概念を打ち破る技法を次々と考案した。晩年の25年以上を費やした、全7部、上演に約29時間を要する超巨大な連作オペラ『光』は、彼の音楽観と宇宙観が融合した集大成と言える。その急進的な作風は、ビートルズやマイルス・デイヴィス、テクノミュージックに至るまで、ジャンルを越えて多岐な影響を与え続けている。晩年まで精力的に創作活動を続け、世界中で講演やワークショップを行い、次世代の作曲家や音楽家に大きな貢献をした。彼の革新的な音楽は現代においても色褪せることはない。東京シフォニエッタでは「Zeitmasse」を以前の公演で取り上げている。



ルカ・フランチェスコニ (1956-)

ルカ・フランチェスコニ(1956-)は、現代イタリアを代表する作曲家で、ルチアーノ・ペリオの正統な後継者の一人と目されている。ミラノで学んだ後、ボストンでシュトックハウゼンの友人でもあったボリス・ブラッハーの弟子、カール・ハインズ・ベルクに学んだ後、イタリアに戻りペリオに師事し、1981年から1984年にかけて、ペリオの個人助手(アシスタント)を務めた。ペリオの創作プロセスを間近で支え、その思考回路を深く吸収したことが、彼の音楽観に深い影響を与えている。1990年にはミラノに音楽制作・研究センター「AGON」を設立し、音響技術と演奏の融合を追求した。彼の音楽の特徴は、緻密な知性と強烈なエネルギーの共存にあり、ペリオから受け継いだ「複雑な響きの重層性」を根底に持ちつつも、ロック、ジャズ、エレクトロニクスなどの要素を柔軟に取り入れ、現代社会の混沌や人間の深層心理を鮮烈に描き出します。特にオペラや舞台作品においてその才能は遺憾なく発揮されており、ミラノ・スカラ座の委嘱作『カルテット』(ハイナー・ミュラー原作)は、現代オペラの重要なレパートリーとして世界各地で上演されている。2008年から2011年にかけてはヴェネツィア・ビエンナーレ音楽部門の監督を務めるなど、現代音楽シーンの牽引役としても多大な貢献をし、伝統的楽器法を極限まで拡張しながら、聴き手の身体に関与するような劇的音響空間を創り出すのが彼の真骨頂である。

